慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ディック・ハワード、カール・E・クレア編著『未知の次元：レーニン以降のヨーロッパ・マルクス主義』
Sub Title	Dick Howard and Karl E. Klare, ed., The unknown dimension : european Marxisms since Lenin
Author	奈良, 和重(Nara, Kazushige)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1973
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.46, No.6 (1973. 6) ,p.127- 132
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19730615-0127

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

Dick Howard and Karl E. Klare, ed., The Unknown Dimension : European Marxisms since Lenin

New York, Basic Book, Inc., Publishers, 1972, X＋418pp.

ディック・ハワード
カール・E・クレア編著

『未知の次元――レーニン以降のヨーロッパ・マルクス主義』

社会主義の資本主義に対する《優位性》は、それがあり得るとすれば、資本主義と等質・等量のことをなし得る、という証しに求められるわけではない。ところが、先進資本主義国も共産主義国もともに、マルクーゼ流の隠喩を用いるならば、高度産業社会に特徴的な《一次元性》を顕著にあらわしている。しかも、逆説的な言い方であるが、マルクス主義的世界観に支配された諸国、あるいは政党自体が、その革命的な未来志向を喪失し、他方で革命主体を自己内部に奪回しようとする者は、伝統的なマルクス主義そのものを見捨ててしまつている。

したがつて、カール・E・クレアがつぎのように書いている言葉は、まさにニューレフトの真意を鋭く衝いたものといえるであろう。「人びとは、今日のわれわれの状況についての何らかの包括的かつ歴史的理論なるものはマルクス主義内部にその場所を見出さねばならぬということに、サルトルと同意せねばならない。全体的、文化的革命に対する自己意識としてのマルクス主義は、それを生みだした諸問題（階級社会の抑圧と苦痛）が解決されていないため、《乗り越えられないわれわれの時代の哲学》なのである。他方、われわれにとつて有用であり得るし、自由の現実化の先取りと本当になり得るいかなるマルクス主義も、殆んどあらゆる点において認識されざるある種のマルクス主義であるに相違ない。われわれの時代の闘争は、まさにそれを創造する任務を至上命令としている」（傍点は筆者）と。

ディック・ハワードとカール・E・クレアによつて編集された本書は、右のような問題視角から、ここ十数年来、マルクス主義の理論と運動に活躍をつづけてきた少壮学者たちによる生きた労作として評価されてよい。とくに「序論」における編集者の二つの長論文は、彼らの思想と行動に賛成すると否とを問わず、少なくともマルクス主義の「未知の次元」を踏査しようとする者にとつては、すぐれた導きとなるであろう。

クレアの論文「日常生活の批判・ニューレフト・認識されざるマ

ルクス主義」は、「生きいきとした自己意識的な理論」から「骨化した虚偽意識」へと転化したマルクス主義自体を厳しく糾弾する。「マルクス主義は……世代ごとにふたたび可能とされねばならない」（ペン・ブルースター）。六〇年代に抬頭したニューレフトは、いわゆる《イデオロギーの終焉》に対応して、《一次元的社会》を超越しようと試みるものである。そして、この未来への投企こそ、《ポジティーヴな自由》への探究にほかならず、そのために社会の批判的理論の再構成が必要とされる。従来われわれに知られ、伝えられてきたマルクス主義は、アカデミックな著述家のものであれ、オーソドックスな政党のものであれ、「制度化されたイデオロギー的機構」であつて、「マルクス主義とは所詮、われわれが現に知つている以外のものである」。クレアは、マルクス主義の基底にある隠れたものを、underground marxisms と呼ぶ。

この未知の、隠れた次元は、ニューレフトの「本能的な反抗」のなかで奪還されたのであるが、マルクスの根源的思想を再発見しようとする努力は、すでに過去半世紀にわたつて多くの理論家たちによつて積み重ねられてきた。彼らを明確に分類することは不可能であるけれども、「マルクス主義を日常生活の批判として構成する企て」が、その思想運動の本質であつたことは疑いない。したがつて、その批判は日常生活の総体、つまり《文化》に焦点をあわせ、社会生活における疎外形態の記述、ないし現象学を発展させてきたのである。家族、性、労働状況、文化活動、言語その他のコミュニケーション、社会諸制度、イデオロギーといつた多彩な研究を通して、動態的な歴史理論に到達すること、そうした例は、ルカーチの物象化論、ライヒの性文化や性格構造、グラムシのイタリア労働者についての実態調査、フランクフルト学派の文明批評、マルクーゼの《一次元性》やルフェーブルの《日常性》といつた認識カテゴリーなどに明示されている。

では、何故マルクス主義が誤解され曲解されてきたか？　その理由は第一に、マルクスの重要文献が最近にいたるまで利用不可能であつたこと、ドイツ社会民主党とスターリン主義によるイデオロギー的歪み、労働者階級のプラクシスから分離されたマルクス主義自体の主観主義への後退、多様な文化的セッティングにわたる理論枠組の構築作業の困難さ、そしておそらく最も重要な理由は、マルクス主義が、これまで社会生活を総体として批判することよりもむしろ、経済闘争という直接的な問題にかかわり過ぎていたという事実によるのであろう。それゆえに、二十世紀におけるマルクス主義の批判的理論は、オーセンティックなマルクス主義たることを主張しなければならなかつたが、まさにその《未知の次元》はロシア革命のインパクトによつて、プロレタリアートが束の間に垣間見たところの「抑圧された意識」を表徴している。

未知の次元の伝統は、マルクス主義の核心に人間の主体性を恢復したことを、その第一の特徴として指摘できる。プレハーノフ、カウツキー、そしてある点ではレーニンのうちにもあつた経済決定論、還元主義、歴史の必然的法則に反対して（エンゲルスの『自然弁証法』は、マルクスの弁証法概念と乖離するものである）、それは、革命的

プラクシスを人間の自己実現として捉え直す。第二に、クレアはルカーチの『歴史と階級意識』を引用して、総体（Totalität）と具体的普遍性というヘーゲルの概念の導入を強調する。このような方法ないし意識のもつ政治的内実はラディカルであり、現実生活をまさに全体として認識するがゆえに、「トータルな革命による現状の超越」（マルクーゼ）への必要性が論断される。それはまた、アンドレ・ゴルツのいう「人間、生活、教育、労働、文明の新しい概念のための文化闘争」である。さらに、正統派マルクス主義と異なつて、未知の次元の伝統は、既成の共産党とか労働組合をプロレタリアートの第一義的な組織体とはみなさず、「労働者評議会」を革命的ストラテジーとする、参加的実践を要請してきたのである。

しかしながら、右のような理論視角が現実化を果たし得なかつたのは、部分的にはその内的弱点の結果であり、また部分的には歴史状況——第三インターとファシズムの勃興——によつて強制された限界でもあつた。事実、この隠れたマルクス主義は、歴史的移行期においてみずからのユートピアを実現せず、高度産業社会の変化しつつある階級構造についての適確な分析を生みだすことなく、「社会理論から社会に対するたんなる《道徳的》あるいは《美学的》批判への退行」を余儀なくされたのである。もうひとつの根本的な弱点というべきは、それが第三世界と資本主義の国際的性質への関心を欠いていたこと、換言すれば、ヨーロッパ的文化の制約を超えられなかつたことである。最後に、理論家たちの多くの業績がきわめてエリート主義的、かつ専門的な高邁なオブスキュランティズムによつて損われてきたこと、理論が《高度文化》に深く染まつた、古典的教養のある人びとによつて書かれたものであつたこと、それも否定し難いと思われる。

以上の考察から顧みて、「後期資本蓄積期におけるニューレフト」の特徴というものは、いかに把握され得るであろうか？　とくにアメリカのニューレフト運動は、明確な世界観なり政治綱領から生まれたわけでなく、ましてやヨーロッパ・マルクス主義の思想傾向とのかかわりは少なく、人種問題、貧困、帝国主義戦争に対する闘いのなかで自覚化され、事実上、マルクス主義の未知の次元の政治的テーマと内容とを具体化した。それが強調する革命的な社会変革とは、ひとりの主体的個人の意識と日常生活を前提条件とし、人間あるいは諸々の人間集団の自己解放、参加デモクラシーに基づく新しい日常生活の創造を目的としている。

クレアの論点を要約すれば以上のとおりであるが、彼は今日のさまざまな運動形態にその可能性を指摘し、高度産業社会とテクノロジーの時代の矛盾のなかに、マルクス主義の新しい理解と新しい社会主義政治のモデルを提示する。アメリカにおけるマルクス主義の課題に限つていえば、国内の少数民族（第三世界に対する抑圧をも含めて）の問題を無視できない。チェ・ゲバラ、毛沢東、フランツ・ファノン、マルコムXらの諸著作に、キューバ革命やヴェトナム革命に、ニューレフトが多大の注意を振り向けてきたのは、むしろ当然のことと言えよう。先進資本主義国は、それ自身の未来にのみかかわることなく、貧困と後進性の状態に置かれている大衆への配慮を

見失つてはならない。アメリカ社会に対する「社会的プラクシスの《批判科学》」たることをめざすマルクス主義は、諸科学の批判的基礎を形成するとともに、否定的な政治的実践への地平を開示しなければならない。

ハワードの論文も、基本的にはクレアと同じ立場にたつて、マルクス主義の「真正な革命的伝統」が最終的に虚偽化されてゆく歴史過程を叙述する。と同時に、その間に《未知の次元》が、イデオロギー的偏向として公然と断罪されながらも、六〇年代の終りにいたつてふたたび熱烈に論議され、読まれだした存在理由を問い直している。「そのような伝統を取り戻すということは、自己自身の歴史的世界内存在、およびそれを変革する可能性を再発見することである。もしもわれわれが、《革命的伝統》として与えられてきたもののうちに、われわれ自身とわれわれの希望とを認識し得ないとすれば、われわれはみずからを疑うべきではなく、われわれが欺かれてきたかどうか、そして如何にして、また何故にそうなのか、を発見するために歴史に問うてみるべきである。われわれはまた、つぎのように尋ねるべきであろう、この伝統の現実化を妨げた情況とは何であつたか、つまり、伝統に対して提起された問題とは何であつたか、そして伝統はどんな問題を提起したのか？」と。

一九一四年八月にSPDが帝国議会において戦争国債に賛成し、第二インターの運命を決定したとき以来、マルクス主義の党と国際的運動が体験した、じつに迷路のような紆余曲折の跡を、ハワードは年代的に簡潔にたどつている。その「歴史的コンテクスト」のなかには、例えば、ベルンシュタインやレーニンに対するローザ・ルクセンブルク、スターリンの『レーニン主義の諸問題』に対するルカーチの『歴史と階級意識』やコルシュの『マルクス主義と哲学』との対比が示され、それらの内容に深く触れられてはいないけれども、思想的コンテクストをもよく窺い知ることができる。同じように、ファシズムを独占資本と帝国主義の策謀に帰し、頽落しつつある土台の上部構造としてのみ《説明》したKDPの図式的イデオロギーに対しては、「性経済」とマルクス主義との綜合をはかり、ゼクスポール運動のなかで具体的に思索した『ファシズムの大衆心理』の個性的な著者が高く評価されている。

ところで、第二次世界大戦後のマルクス主義は、一九五六年ソヴェト共産党第二十回党大会でのスターリン批判によつてドラマティックの変容を遂げたが、ちょうど同じ頃に西欧の資本主義は安定化し、議会主義の政党政治が定着化のきざしを見せはじめた。このような状況のもとでのマルクス主義の動向を、ハワードはつぎの四点に確認している。㈠国際運動内部における多極化――イタリア共産党のトリアッティが主導する共産主義への「イタリアの途」、一九六〇年に端を発する中ソ論争。㈡《科学的》傾向――アルチュセルやガルヴァーノ・デルラ・ヴォルペなどに代表され、マルクス主義のヒューマニズム的あるいはヘーゲル化した解釈を、資本主義社会の本質を見誤まるものとし、『資本論』の厳密な科学的論理の読み方を主張。㈢第三世界の革命への期待――中国、キューバ、アルジェリアなどの革命の成功に注意を喚起され、西欧における革命の教訓

をそれらから学びとろうとする企て。㈣質的に異なつたマルクス主義の再定義――《西欧マルクス主義》の理論家によるマルクス思想の再発見の試み、つまりニューレフトの革命理論、がそれである。

右の㈢と㈣の部分が『未知の次元』に収められている諸論文にあたつている。それらは、ロシア革命の成功から一九二〇年代まで、三〇年代から第二次大戦まで、戦後と新しい時期に区分され、思想家べつに配列されている。以下にその項目を掲げておく。

第Ⅱ部「ロシアの成功と西欧におけるプロレタリア革命の没落」

3、ジェルジ・ルカーチ――革命主体の探究（アンドリュ・アラトー）
4、エルンスト・ブロッホ――希望の弁証法（デーヴィド・グロス）
5、カール・コルシュの『マルクス主義と哲学』（ミハイリ・ヴァイダ）
6、アントニオ・グラムシ――主体的革命（ロマーノ・ジィアチェッティ）
7、左翼コミュニズム――レーニンへの回答（スタンレー・アロノヴィッチ）

第Ⅲ部「空白期間」

8、ヴィルヘルム・ライヒのマルクス主義――性抑圧の社会的機能（バーテル・オルマン）
9、フランクフルト学派と批判的理論の生成（マーティン・ジェイ）
10、ヴァルター・ベンヤミン――商品崇拝、近代性、歴史体験（シェリー・M・ウェーバー）
11、技術的合理性の時代における理論と実践の弁証法――ヘルベルト・マルクーゼとユルゲン・ハバーマス（ジェレミーJ・シアピロ）

第Ⅳ部「戦後の反応と新しい始まり」

12、サルトルのマルクス主義への貢献（ジァン＝クロード・ジラルダン）
13、アンリ・ルフェーブルとマルクスの現代的解釈（アルフレート・シュミット）
14、ガルヴァーノ・デルラ・ヴォルペの《科学的弁証法》（マリノ・モンターノ）
15、ルイ・アルチュセルとマルクス主義のための闘争（ロビン・ブラックバーンおよびガレス・ステッドマン・ジョーンズ）
16、新しい状況・新しい戦略――セルジュ・マレとアンドレ・ゴルツ（ディック・ハワード）

これらの諸論文の豊富な内容をここに論究するいとまは無いが、すでにわが国においても、マルクス主義思想をめぐつて多くの反響を呼んでいるテーマであつて、各思想家の主要作品も殆んど翻訳紹介されているので、その必要は認められないであろう。だが、個別研究はさておいても、これだけ綜合的に論じられた研究成果を一望のもとに見うるようなものは未だ無い。しかもいずれの作品も、わが国のものがとかくアカデミックに過ぎ、途方もなく難渋な調子を帯びがちであるのに反して、それらにたちまさつて、明快に批評されている点は注目すべきである。マーティン・ジェイの論文のごときは、その好例である。二つの世界大戦のあいだの「空白期間」に

おけるマルクス主義は、ファシズムとスターリニズムの弾圧下に、それ自体、自己韜晦への誘惑に傾きがちであつた。ホルクハイマーを中心とするフランクフルト学派に属する人びとの曖昧さと難解さは、この意味で当然であつたかも知れない。一九三〇年代における批判的理論の生成を、他の思想（ドイツ観念論、生の哲学など）とのかかわりによつて説明するジェイの試みには、卓越した力量を感じさせる。ともかく本書は、マルクス主義が、現代社会のひとつの問題ではなく、問題の複合と矛盾を、まさに日常性のリアリティにおいてトータルに把握しようとする人間的努力であるということを、理解させてくれるであろう。

奈良和重